

共生・公正・創造



東日本タイムズ号外

<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~JRTU-HWU/>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NIT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

【シリーズ24】

東労組の「管理者試験受験者」対応姿勢の変化と経営陣の「危機管理意識」への懸念

“総団結”の美名の下に、松崎・本部派と「嶋田たち」派との内部確執の“休戦条約”が成立した形の「JR東労組『2.10定期中央委員会』」終了後、同労組東京地本は同日、第26回定期地本委員会を開催した。

この東京地本委員会における鳴海書記長の総括答弁が3月1日付機関紙『JR東労組 東京』（第200号）に掲載されているが、「上位職にチャレンジすることを全系統で進めたい」という発言があり、読んで「うん?!」と大いに気になった。（中略）

拙著『もう一つの未完の「国鉄改革」』は、その昔、筆者が手がけた職場規律は正問題である「国鉄黒磯駅事件」を冒頭に置いた。同事件では管理者に対する暴力行為があった2名の黒磯駅職員が「懲戒解雇」となったが、その2名の単純粗暴性格者を教唆・扇動して不幸な目に遭わせた「真の首謀者K.H」については証拠不十分で手が届かず、口惜しい思いをした。そして国鉄改革の過程で、「革マル活動家K.H」はJR社員として生き延び、易々と管理者に転身した。

筆者は、こうした実務体験からして、すでに“5年後”も経過した新潟支社の「NCメンバー助役」たちの現状も大いに気になるし、2.10東京地本第26回定期地本委員会の「鳴海書記長発言」も安易に見過ごせないのである。

「JR東日本革マル問題」の存在を十分に承知しつつ、見て見ぬ振りをしているかのように筆者には思えてならないJR東日本労政担当幹部は、一体、いつまでこの状態を続けようとしているのだろうか。手遅れになる危険性、いや既に手遅れになっている可能性はないのだろうか。「革マル管理者の誕生など杞憂にすぎない」と自信を持って断言できるのだろうか。

筆者の危機意識としては、JR東日本においては、松崎氏及びJR革マル派完全支配の東労組に評判の良い管理者（経営者も!?)は“要注意”の時代が既に来ていると言わなければならないくらい切迫しているのである。

<参考資料>

鳴海書記長総括答弁（抜すい）

「……。役員は魅力がなければ駄目だ。泥を被ることも、献身的ということもそうだ。努力し、チャレンジする役員の背中を組合員が見て、魅力を感じる。役員増についてもみんな考え直していきたい。議論を進めるために、具体的に述べる。

上位職にチャレンジすることを全系統で進めたい。

硬直的な人事について見直しを進めていきたい。

自主活動（提案活動・小集団活動）を積極的に進めていく。

JR東日本の屋台骨は東京支社であり、様々な施策の中心を担っている。組合も、責任を持って施策のスピードを上げてほしいという要求に応えていきたい。間違いなく、JR東日本は世界に冠たる鉄道会社である。

中央委員会での角岸委員長のあいさつを述べて、総括答弁とする。

『このまま行けば東労組は、17年間の苦労と成果を失うことになる。この大目的のため、組合員家族のために汗をかこう。そして、総団結して6月の本部大会に向かっていこう』」

最も気になる気になる部分に傍線を付し、ゴシック字化しておいた。

「歴史は繰り返す」というが、“形勢不利”と見れば、「松崎氏&動労コペ転」の歴史もまた繰り返すようである。それが「何を守るためのなのか!?’」は、今やもう、言わずと知れているのではないかと思うのだが、敢えて言う。“松崎氏及びJR革マル派によるJR総連・東労組の完全支配体制”をである。

< JR東日本労政『二十年目の検証』174ページから179ページより抜粋 >

民主化の声・声・声・・・

2005.12. 2 その24

(読んではいけない?) 「小説労働組合」の読み方! (4)

～月刊誌『自然と人間』を通じた党革マルとの関係?～



* 軽部委員長が大元に鈴木の処遇について報告した。鈴木と顧問の留任を確認した次の日である。報告が終わらないうちに大元は軽部を怒鳴りつけた。「なにを寝ぼけているんだ。鈴木を誰が保障するというのか。鈴木がケジメをつけるために辞任するなどといっているのは本音じゃあない。オレからの逃亡だよ。

すぐに鈴木のリクエスト留任を撤回しろ」(p. 16) やがて、「大元が鈴木のリクエスト就任を要請したにもかかわらず、鈴木が拒否した」との話が組織内に拡げられていった。(p. 18) 後に会議の報告を受けた大元が軽部達を怒鳴りつけた。「鈴木をなぜ辞任ではなく解任にしなかったのか。なぜ有志会議から除名しなかったのか。ボケもいいとこだな。鈴木は解任で除名だ。いいな」(p. 19)

* 大元が鈴木を公然と社会的に葬り去ろうとした真の理由は、もちろん鈴木が『記録』を出したからではない。それは表向きの理由にすぎない。大元は鈴木が南国鉄道労組問題や「労働問題研究所」構想に反対した時点から、いつ、どのように排除していくか思いはじめていた。2002年の10月はじめに鈴木の出身地である北本州鉄道信越地本のOBや組合員たちが、鈴木のリクエスト引退の激励会を開催した。500余名の参加者の前で大元の祝電が読み上げられた。「初心に帰り逃亡を反省せよ」鈴木は<これは、結婚式に弔電を送ってきたようなものだ。大元の自分への公然たる排除宣言だ。初心に帰るのはどっちだ>と思った。「オレからの逃亡者」ときめつけた大元の「祝電」の余りの異常さに、鈴木はもちろん参加者は呆然とした。大元は、この集会を「オレに対決する信越地本の総決起集会だ」と邪推していた。(p. 33~34)

東労組の組合員が配っている本であり、解説書まで出回っているわけであるが、告訴好きの団体のことを考え個人名は極力避けると、おそらくこの文脈の読み方は次のとおりであろう。

【大元(M氏)が鈴木(F氏)を公然と社会的に葬り去ろうとした真の理由は、もちろん鈴木が『記録』<註・福原福太郎著『記録「国鉄改革」前後 - 労組役員の備忘録から - 』(2003年5月1日刊)>を出したからではない。それは表向きの理由にすぎない。大元(M氏)は鈴木(F氏)が南国鉄道労組問題(JR九州労大量脱退問題)や「労働問題研究所」構想(自然と人間社の会社化構想)に反対した時点から、思いはじめていた】

月刊誌『自然と人間』は以前、JR総連から発行されていた。そして今、(株)自然と人間社(2002年7月1日設立)に変わった。社長は、加藤實氏(革マル派解放社発行の書物『連合型労働運動に抗して』の中で「JR総連副委員長であると同時に古参党员でもある加藤実が...」と記述されている)である。JR総連と月刊誌『自然と人間』を通じた党革マルとの関係を疑わざるを得ない。